

枯葉剤と毒概念の変容～米越比較

上杉健志（日本学術振興会特別研究員 PD）

「毒物災害」の社会科学研究では、毒物汚染に対する科学者と非科学者の認識の比較がその中核をなすことが多い。その反面、毒物による公害がいかにして一つの現象として現れるかという問題はあまり研究の対象として扱われてこなかった。

ベトナム中部トゥア・ティエン・フエ省のアルーイ盆地はベトナム戦争中大量の枯葉剤が撒かれた地域の一つである。ところが、地元の住民は枯葉剤による人体への被害に関しては1990年代末まであまり知らなかったという。一方、アメリカ合衆国では、1970年代末には「枯葉剤被害者」と自称する集団が生まれている。本発表では、この米国における「枯葉剤症」概念の誕生の歴史と、アルーイにおけるエスノグラフィーを並列することを通して、枯葉剤症概念が想定する毒の概念を考察し、「集団的現象（aggregate effect）」としての毒概念の意味を検討する。

プロフィール

学振 PD、受け入れ教官は、森田先生。マギル大学にて博士号取得後、富士常葉大学での非常勤講師を経て現在に至る。PD 研究のテーマは、公害裁判と疫学的証拠の日米比較。その他の研究関心は、地熱インフラ開発と温泉の関係。

北部ウガンダにおけるキリスト教信仰覚醒運動の伝播過程と現在

飛内悠子（日本学術振興会特別研究員 PD）

1930年代末にウガンダ南西部で始まった聖公会を基点とする東アフリカ信仰覚醒運動は、1940年代末には北部まで到達した。北部ウガンダで信仰覚醒した人々は、政情不安に脅かされながらも伝道を行い、時には南部スーダン難民と協働しながら活動した。現在「新たな」信仰覚醒者の台頭や南スーダン難民の帰還などによって運動は下火となっているが、若い教会指導者たちが東アフリカ信仰覚醒運動の記憶を自身の信仰強化の糧としようとする試みも見られる。

プロフィール

2014年上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科地域研究専攻修了。博士（地域研究）。専門はスーダン、南スーダン地域研究、難民・強制移動研究。博士論文では南部スーダン出身者の移動とキリスト教との関わりを見てきている。主な業績：『スーダン』におけるキリスト教信仰覚醒運動：ククの人々の移動を基底として『アフリカ研究』84号、31-44、2014年；『見出される差異と結びつき：暫定期間と南スーダン独立後のハルツームに生きるキリスト教徒』上智大学イスラーム地域研究センター、2015年。

日時

2015年7月22日（水） 16:20 ～ 18:20

場所

大阪大学人間科学研究科東館 106 教室（吹田キャンパス）

予約不要・参加無料

お問い合わせ先

大阪大学大学院人間科学研究科人類学研究室

Tel: 06-6879-8085（火～金） E-mail: anthro@hus.osaka-u.ac.jp

交通アクセスは、右のQRコード、または

<http://www.hus.osaka-u.ac.jp/ja/access.html> をご参照ください。